

2 スリット入コンテナ

マルチキャビティコンテナと同様に、容器の内部にリブが付いていて、側面にスリット（縦孔）が入っているタイプ（MT-150-40P、東北タチバナ社製）



スリット入コンテナ



リブ型とスリット型の根の形状伸長の違い

リブ型：側根は真っ直ぐ下方に伸長し、根の成長点は底面に集中する。
スリット型：スリット入の部分は、側根が底面までいかず途中で空中根切りが行われ、新しい根の発生が見られ、成長点は側面と底面に分散される。

Ⅲ 育苗方法

1 用土

用土は、発根後の育苗を考慮し、通気性、保水性、排水性を維持するように調整を行う。

【用土の種類】

○ベース用土（植物性用土）

・ヤシ殻ピート（ココピートオールド）

ココピートの長短繊維分により排水性、保水性、通気性および養分元素の吸着保持などの特徴があり、コンテナ底面からの培地の脱落が少なく、崩れにくいため根鉢の成形性がある。



- ・ピートモス

水気の多い場所で育った植物を細かく砕いて乾燥させた土である。主にコケ類を原料としており、乾燥時の容量の10～30倍ほどの水分を吸収する特徴がある。なお、コンテナに適するのは長短繊維の混合したもの。

- 調整用土

- ・鹿沼土（細粒）

栃木県鹿沼市産出の軽石で、通気性保水性が高く、強い酸性土でもあり雑菌をほとんど含んでいない。

- ・バーミキュライト

原料は、苦土蛭石であり多孔質で非常に軽く、保水性・通気性・保肥性がある。pHもほぼ中性であり雑菌をほとんど含んでいない。

2 用土の充填

①用土はコンテナ容積量の1.8～2.0倍の量を準備する必要がある。

②ココピートオールド、鹿沼土及びバーミキュライトを容積比（4：1：1）で混合するが、コンテナは個々の容量が少ないので、全ての材料を均一に十分混合する。なお、容器への充填後は、水分が十分に浸透しないので、攪拌しながら適量の散水を行う。



3種類の用土の混合前



用土の攪拌



用土の攪拌

全ての材料を均一に混合するため、攪拌機やスコップなどを用いる。また、散水量の目安は、混合した用土を強く握って水がたれる程度（概ね含水率35%）。

③用土の充填は、塊や隙間が枯損の原因となることから、容器内に隙間なく十分に
入れる。なお、容器内に用土が十分に充填されていないと乾燥が早くなる。

※容器の消毒：一度使用したコンテナを再度しようする場合は事前に十分な熱
湯または薬品（チウラム殺菌剤等）により殺菌を行う。



コンテナ容器（150cc）に充填



インナーポットの活用

用土を充填する前に、インナーポット（谷口産業（株））を予め入れておくことにより、育苗過程において間引きや枯損した箇所への移動などが効率に行え、育苗面積を有効的に活用できる。



インナーポットをコンテナ容器に設置

3 さし穂の選定

芯 芽：さし付け後におけるさし穂状態は、ほぼ直立状態を保ち、活着後の上長成長は良好である。

側 芽：さし付け後における穂の状態は、芯芽よりはやや傾斜した穂が多く、活着後の成長は変わらないが、多少の曲り苗の発生が多い。

4 さし付け方法

ア 時 期：目安は、採穂する台木の育成時期により差があるが、台木の主軸から発生した一次枝基部の色が緑から黄緑色に変わり始める頃で、台木の育成がビニールハウス内であれば5月下旬から6月中旬、台木の育成が露地であれば6月中旬から7月中旬頃である。

なお、7月のさし付けは、高温による萎れや雑菌の発生が心配されるため、管理面から6月上旬が適期と考えられる。また、群馬県では9月上旬でもさし付けが可能である。

イ さし穂：さし穂は約5～7cm程度の長さをカミソリなどの切れ味のよい刃物を使用して行う。

採穂後は、切断部は乾燥しないよう直ちに水を張った容器に入れ、さし付けまで漬けておく。

※切断部の切り返しは行わない。



カミソリによる採穂



切口の乾燥防止



さし穂

ウ さし付け：培地に案内棒で穴をあけ、ピンセット等でさし穂を穴に入れ周囲の用土を寄せ、隙間ができないように指で押し固定する。
なお、さし付ける深さは、穂長の1/3～1/4が適当で、深挿しは根系の発達が悪く、浅挿しは穂が倒れ主軸が曲がったまま木化する苗の発生が増加する。



案内棒で誘導



さし付け完了



さし付け後のかん水



さし付前と直後の培地へのかん水

混合した用土の準備はさし付ける直前に行うが、用土の乾燥などを防ぐため、コンテナ容器ごと数秒間水に漬けた後にさし付けを行う。また、さし付け直後は、さし穂と用土が馴染むようジョウロなどで用いて散水を行う。